

埋文センターニュース

第10号

1999. 10. 1

津市埋蔵文化財センター



津市指定文化財となった高茶屋銅鐸 1 号鐸（高さ66.3cm）

高茶屋銅鐸（1号鐸） 津市指定文化財に

昭和61年7月に津市南部の高茶屋小森町から出土し、現在、津市埋蔵文化財センターで所蔵している銅鐸一口が、本年3月31日に行われた津市文化財保護委員会の答申を受け、5月6日付けで津市指定文化財〔考古資料〕に指定されました。

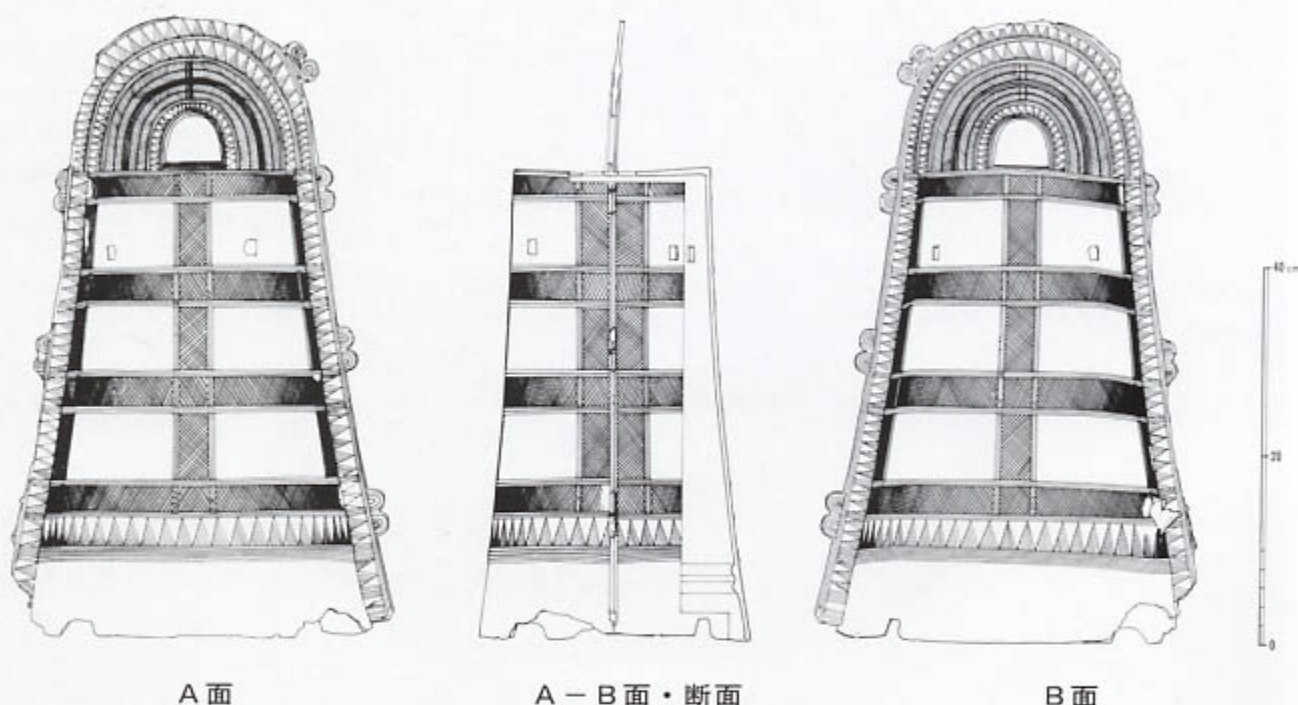
本ニュースの遺物紹介で、この銅鐸については若干触れています（『埋蔵センターニュース第4号』）が今回は指定の契機となった新たな事実を加えあらためてご紹介します。

今回指定となった銅鐸（以下、1号鐸と呼称）は、高さ66.3cm・重さ15.4kgの大きさ・重さで、形式的には「突線鈕2式六区袈裟襷文銅鐸」に分類されています。突線鈕とは、突出した断面を持つ線（突線）によって鈕（吊り下げ部分）の文様が区画されたものをいい、銅鐸の型式変化を辿るうえで大きな指標となっています。鐸身は襷状に交差する縦横の帯で6つに区画されており、この1号鐸は比較的新しい部類の型式に相当する銅鐸です。

実は、銅鐸発見当時から1号鐸以外にも銅鐸が出土したことが噂され、採集された破片から最低でも3口は存在すると考えられてきました。採集された銅鐸片は30個にのぼり、1号鐸とともに津市で保管してきました。

そうした中、平成8年に国が購入した関西地方出土といわれる銅鐸（以下、2号鐸と呼称）と津市保管破片との接合が確認され、2号鐸が高茶屋小森町出土であることが判明しました。県内で唯一、複数個の同時出土が明白となったのです。現在、東京国立博物館が所有する2号鐸は1号鐸に比べて一回り大きく、高さは86.3cmあって、全体の形もやや細身です。片側の鐸身の一部が大きく破損していますが、この鐸身の破損部分に津市所有の銅鐸片のうちの18片が接合できたのです。

このように、同一箇所での複数個の銅鐸出土が確定し、その資料的価値が1号鐸、2号鐸とも相互に高まったことを受け、津市所有の1号鐸が市の文化財に指定されたのです。

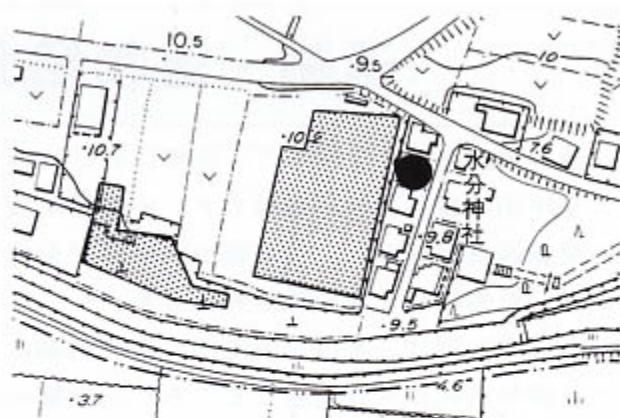


1号鐸実測図（1：8）

これらの銅鐸は、中勢地域最大の河川である雲出川下流域を見下ろす台地縁辺部に埋納された（意識的に埋められた）もので、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落遺跡である四ツ野B遺跡で出土しました。集落内での出土は稀れて、集落と銅鐸埋納の関係を考えるうえでも貴重な発見例といえます。

これらの銅鐸は土木工事中の発見で出土状況はわかりません。そこで銅鐸自体の遺存状態に着目して埋納状況を推定すれば、1・2号鐸とも一方の鰭部分と鐸身の一部が発見時に受けた損傷で大きく欠損しており、鰭を上下に横倒しにして埋められたと推定できます。

最後に、1号鐸独自の特徴を記しておきましょう。それは、鈕と鰭の鋸齒文が外向きになる文様構成が見られることです。これらは「内に包み込む」という意味で内向するのが一般的です。逆向きの鋸齒文にはどんな意味があるのでしょうか。謎の祭器・銅鐸。まだまだ不明な点が多いのも事実です。（中村）



銅鐸出土地周辺地形図 (1:2,500)



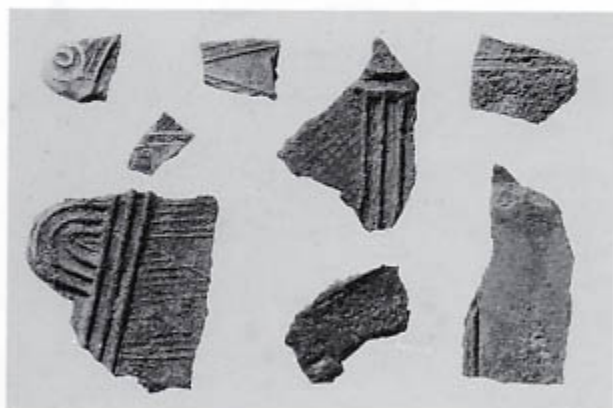
四ツ野B遺跡の住居址群



2号鐸（東京国立博物館所蔵）



2号鐸鐸身部分の接合状況



採集された銅鐸破片

遺跡・遺物紹介⑨ 藤谷窯跡群

藤谷窯跡群は、久居市との境界に近い津市大字半田字藤谷にある遺跡です。昭和50年度に発掘調査が行われ、須恵器や埴輪などを焼いていた窯跡が2基発見されました。

藤谷窯跡群は、半田丘陵南部の標高約40mの丘陵が谷状に入り込んだところに、丘陵の傾斜を利用して造られていました。そこから約700m南には、5世紀後半に三重県で最初に須恵器を生産したといわれている久居古窯址群(久居市)があります。ロクロを使用し、高温の窖窯で焼成する須恵器の生産技術が畿内から伊勢湾岸へと伝わってくると、その技術を応用して、この地域の埴輪も窯で焼かれるようになりました。久居古窯址群や藤谷窯跡群から2kmほどの東の津市大字垂水でも、埴輪を焼いたとみられる法ヶ広窯跡が発見されています。このほかにも津市周辺ではヲノ坪窯跡(津市一身田上津部田)や内多窯跡(安濃町)でも、須恵器と一緒に埴輪を焼いていたことがわかっています。

藤谷窯跡群の2基の窯跡の前には、灰や焼け損じた製品などを掻き出した灰原が広がっていました。灰原から出土した遺物の状況から、①この2基では須恵器よりも埴輪の生産が中心であったこと。②円筒埴輪や朝顔形埴輪(上部がラッパ状に開いたもの)をはじめ、

家、盾、靱(矢を入れる筒)、蓋(貴人にさしかける長い柄の笠)、鶏、馬、人物など、様々な形象埴輪を作っていたこと。③操業の最盛期が5世紀末から6世紀初頭であったこと、などがわかりました。窯跡の周辺では、土取りがかなり進んでいたために、この2基以外にあと窯がいくつあったのかということや、須恵器や埴輪を作っていた工房のことなどはわかりませんでした。この遺跡では、埴輪づくり専門の工人たちが働いていたものと考えられます。

埴輪は、古墳に立て並べるために作られたものです。ですから藤谷窯跡群の埴輪も、かならずどこかの古墳に立て並べるために作られていたはず。最近では、津市とその周辺の古墳や窯跡から出土した埴輪の胎土に含まれる成分を科学的に分析して、埴輪の産地を明らかにしようという研究も行われていますが、今のところ、どの古墳のものが藤谷窯跡群で生産された埴輪なのか、はっきりとしたことがわかっていないのが現状です。この地域の埴輪の生産と供給のシステムを解明するためには、古墳や窯跡から出土した埴輪のひとつひとつを詳しく調査し、形や作り方の特徴を比較して検討を重ねていかなければならないと考えています。



遺跡位置図



周辺地形図 (1:5,000)

津市周辺では、6世紀頃から横穴式石室の古墳が築造されはじめます。その一方で、前方後円墳や埴輪に埴輪を立て並べた古墳は6世紀中頃にはほとんど姿を消してしまいます。なぜ前方後円墳や埴輪が消滅してしまったのか、その理由を見い出すのは容易なことではありませんが、藤谷窯跡群の衰退については、古墳での埴輪の需要の減少が少なからず関わっていたものと考えられます。

(藤田)



発掘された1号窯



鶏形埴輪



顔に入墨のある人物埴輪



片刃の鋸が描かれた靱形埴輪



出土した須恵器と円筒埴輪

安濃津子ども遺跡調査隊

今年度津市では、歴史と文化に育まれた新たな圏域文化の創造をテーマにさまざまな文化事業を実施してきました。7月24日と25日には、^{しもべざいちょうつおき}下弁財町津興の育生健康公園で子ども達を主役に遺跡の発掘調査を実施する「安濃津子ども遺跡調査隊」事業を実施しました。調査には市内の小中学生とその保護者約 250

名が参加し、遺構掘削のほか、出土遺物の洗浄や分類といった整理作業の一部も体験してもらいました。今回の調査では、安濃津に関連する遺構は確認できませんでしたが、調査に参加された皆さんの郷土の歴史に対する関心をより一層高めていただくことができたのではないかと思います。



《編集後記》

上半期は発掘調査が少なかった反面、5～6月は今年度から本格的に開始した小学校への出張講座など、普及業務が集中しました。下半期には中世城館の調査を予定していますので、次号では現場からの「ニュース」をお伝えできると思います。 〈中〉

発行日：1999.10.1
編集・発行：津市埋蔵文化財センター
〒514-0058
三重県津市安東町1225
TEL 059-229-0210
FAX 059-229-4601
印刷：株式会社サカ